モンキーキッカーズ!!　-フットサルにかける青春-

権堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンキーキッカーズ！！　ーフットサルにかける青春ー

【Ｎコード】
Ｎ７９８５Ａ

【作者名】
権堂

【あらすじ】
三陸高校のサッカー部の大島幸二は、二年生にも関わらず、一年生と雑用係をしていた。そんな時、部員からも顧問の先生からも認められていない事に気が付き、大島幸二は小学一年生から続けてきたサッカーをやめる決意をする。やめた後、クラスメイトの、太田健介から、フットサルのチームを作らないかと誘われる。しかし、この太田健介、親と喧嘩して叔父に預かって貰っている、ちょっとした問題児だった。サッカーをやめた大島幸二、親と喧嘩した太田健介、その他、不良、いじめられっ子、嫌われてるが惚れやすい男

など、おちこぼれ高校生がフットサルチーム、モンキーキッカーズを結成する。

第一章　第1話　夏の屈辱（前書き）

初めまして！サゴニゴンです。
サッカーに詳しくない人は分かりづらい部分があるかも知れないですが、
基本、あまりサッカーの事は出さないのでよろしくおねがいします！（うそくせ～）

第一章　第1話　夏の屈辱

「おい！もっと走れ！」
太陽がジリジリと照りつけるグラウンドに、顧問の藤山先生の声が響き渡る。
夏休み、乾ききった共学の三陸高校のグラウンドが、砂埃でいっぱいになるほどサッカー部が走り回って、ボールを追いかける。
一年生は球拾いだった。二、三年生が蹴ったボールを忙しく取りに行く。
ボールを取りに行くのは、ボールに一番近い人間と決めていた。
「お前の方が微妙に近いぞ。」
誰かがそう言うと、一番近い一年生は、仕方なく取りに行く。
そんな中、一人だけ一年生から敬語で言われる部員がいた。
「先輩、取ってきて下さい。明らかに先輩の方が近いです。」
先輩と呼ばれた部員がしぶしぶ取りに行く。
彼の名前は　大島　幸二。
三陸高校の二年生だ。サッカーは小学生からやっている。
小学生から中学二年生の初めまで、いつもレギュラーだった。
ＦＷとして活躍し、ドリブルやパス、テクニックは常に回りの人間より上だった。
だけど、中学二年生の初夏、幸二はある異変に気がついた。
いつも、簡単に抜ける相手から、ボールをしょっちゅう奪われるようになったのだ。
時が経つに連れ、その異変は明らかになっていった。
幸二は、背が伸びるのが遅かった。
背が小さければ、自然に回りの人間よりも体力がなくなっていく。
今まで自分より小さかった連中にもドンドン抜かれ、中学の初夏あたりから、幸二は背の順で、いつも前の方だった。
そしてついに、一年生にまでボールを取られるようになり、幸二は

完全に自信を失った。
しかし、幸二は諦めずに、結局中学の3年間、部活を一回も休まずに行った。
そして、三陸高校に入学。中学の辛い経験があったにも関わらず、サッカー部に入部した。
高校に入っても、試合には出られずにいた、だけど、練習は一回も休んでいなかった。
それから高校一年生の終わり頃、背は周りの人間と変わらなくなってきたが、それでも試合には出られなかった。
幸二はサッカーが大好きだった。自分がダメでもボールが蹴れれば、試合に出られなくてもいい。
毎日頑張ってれば、いつか報われる。幸二はそう信じて、中学二年生の夏からやってきた。

一年生の役割は、ボールの手入れや練習着の洗濯など、雑用ばかりだった。
幸二ももちろん一年生と一緒に雑用係。ボールが触れるのは、少しの時間だけだった。
練習が終わり、幸二は部室で着替えている部員達に、飲み物が入ったやかんを持って行った。
「しっかしアイツ哀れだよなぁ。二年生のクセして、一年生と一緒に雑用係。俺ならやめるね。」
更衣室のドアから、二年生の3人のそんな言葉が聞こえた。幸二は立ち止まり、その会話を盗み聞きした。
「っま、ダメな奴はダメって事だろ。あいつ、中学の一年生まではいつもレギュラーだったらしいぜ。
だけど、今はこのザマだ、天狗になってたんじゃねぇの？」
自分の事だ。
幸二は、ここで初めて気がついた。これ以上聞くのは怖かった。だけど、どこかに聞きたい気持ちがあった。

しかし、次の言葉を聞いた瞬間、幸二は逃げ出せずにはいられなかった。
「あんな奴、どんなに頑張っても試合に出られないよな。
この前、職員室で先生が『やる気のない幸二みたいな人間は試合に出せない』って言ってたのを聞いちゃったんだよ。おちこぼれってヤダヤダ。」
幸二は愕然とした。やかんをドアの前に置いて、急いで部室から出た。
外に置いたバックを肩にかけ、何も言わずにやみくもに走って帰った。
「やる気がない？誰がやる気がないだよ！俺は中学二年から諦めずにやってきたんだ。
部活ですら一回も休んだことないのに！部員どころか先生にすら認めてられないなんて！」
幸二は、そんな事を考えながら、ひたすら走った。
そして、決心した。
「こんな部活やめてやる。いつか努力が報われて試合に出られたとしても、あんな奴らがいるチームのために何か戦えない！」
幸二は決心がついた時、目頭が熱くなってきたのに気がついた。
幸二は、小学一年生からやり続けていたサッカーをやめた。
絶望からの悔しさが、幸二を縛り付けた。

第一章　第1話　夏の屈辱（後書き）

どうでしたでしょうか？
最後まで読んだ人は絶対コメントを下さい！（いや、絶対とは言わない！だけど出来れば・・・なるべく・・・絶対・・・）

第一章　第2話　フットサル

「今日でサッカーを辞めます。」
幸二がロッカールームで話を聞いた翌日の放課後、職員室で顧問の藤山先生に退部届を提出した。
「突然どうした？あれだけ頑張ってきたじゃないか。」
藤山先生はそんなことを聞くが、理由は分かっていた。
「理由は言いたくないです。親も許してくれました。サッカー部を辞めます。それだけです。」
幸二はそう言うと、冷房の効いた職員室から小走りで出て行った。

幸二はもう使わないであろうサッカーのバックを肩にかけて誰もいない校舎の屋上に来た。
空は既に紅色に染まる夕方だ。
幸二は屋上の真ん中に座り込み、バックの中から溶けた保冷剤と一緒に入ってるお茶のペットボトルを取り出した。
「俺もうダメかな・・・明日からサッカー部の連中に白く見られるのか、気分悪いな・・・。」
幸二はペットボトルの少しぬるめのお茶を一口飲んで呟いた。
退部届を提出してから、幸二は何となくこの学校に通う自信がなくなってきた。
サッカーが全てじゃない、サッカー部以外の友達だってたくさんいる。
だけど、幸二はこの学校に居場所がなくなっていく気がしてならなかった。
「ゴロゴロゴロ・・・」
幸二がそんなことを考えていると、後ろからいつも使っているのより、一回り小さいボールが転がってきた。
「よっ大島。」

少し茶髪の入った丸坊主の男が、右手を挙げながら来た。太田健介。幸二のクラスメイトだ。
クラスメイトだが幸二は特に健介とは関わりがなく、クラスでは別のグループだった。
「太田？何だよ。」
少し、元気のない声で幸二が言うと、健介が言った。
「お前、サッカー部辞めたんだろ。」
「え？何で知ってんだよ？」
「聞いたよ、一年坊主から。理由は知らねぇけどな。」
健介はそう言うと、幸二の横に転がっているサッカーボールを取り出した。
「幸二、これが何だか分かるか？」
おもむろに健介がそう聞くと、幸二は少しだけ警戒心を持って答えた。
「サッカーボールだろ。サッカー部が使ってるのより少し小さい、４号球だろ？」
「そう、４号球。普通は小学生のサッカーで使うサイズのボールだよな？
だけど、これをプロで使う競技を知ってるか？」
幸二はさっきより、さらに警戒心を高めて答えた。
「・・・フットサル。五人制のミニサッカー。」
「正解！」
健介は急にテンションを上げて立ち上がった。
そして、幸二に振り向きながら言った。
「つぅことで、単刀直入に言うぞ！俺とフットサルチームを作って下さい！」
健介は頭を下げ、右手を真っ直ぐと幸二に差し出している。
「おっおい・・・お前何言ってるんだ・・・。」
幸二は、健介の言うことが少し分かっていたが、実際に言われると対応に困る。

「俺はな、サッカーを辞めたんだ。これからは普通に遊んで、勉強して、出来たら・・・彼女も作って、
とにかく！俺はサッカーとは離れる生活に戻る！諦めるときはキッパリと諦めるんだ！悪いが他の奴を探してくれ！」
幸二はバックを肩にかけ立ち上がって帰ろうとした時、健介はすかさず幸二の前に回り込んで土下座した。
「頼みます！俺は高校に入ってから部活を何もしてなかった！毎日何か遊ぶことを探して生きてきた！
だから、熱くなれる事をしたいんだ！」
「それが何でフットサル？メンバーが何で俺？そして、サッカーを辞めたこのタイミングで何で俺を誘う？」
「え～と、それはなぁ・・・あれだ！あれ！俺と同じ待遇だからだ！」
「・・・同じ待遇？」
幸二は、何のことだかを考えた、その時、ロッカールームで聞いたあの言葉を思い出した。
「あんな奴、どんなに頑張っても試合に出られないよな。
この前、職員室で先生が『やる気のない幸二みたいな人間は試合に出せない』
って言ってたのを聞いちゃったんだよ。おちこぼれってヤダヤダ。」
「あんな奴・・・おちこぼれ・・・オチコボレ・・・。」
「え？」
幸二がいきなりブツブツと言い出したため、健介が土下座していた顔を上げた。
「いや、何でもない！とっとにかく！俺はやらないからな！あばよ！」
幸二は早歩きで屋上の出入り口を通る。健介は転がっていたサッカーボールを拾って、幸二の後を追う。
「頼みますぜ旦那！お願いしますよ！」
「バサッ！」

突然、健介のバックから一冊の本が落ちてきた。それを、幸二が拾い上げる。
「なんだこれ・・・うわぁ！」
幸二が、その本の表紙を見て子供のように目を輝かせた。
幸二が見た物は、色々なグラビアアイドルを集めた写真集だった。
「あっ旦那もお年頃ですもんねぇ。どうです？メンバーになってくれたらタダでお譲り致しますよ？」
健介がセールスマンの様な口調になる。
「うぉ！うは！あはは！」
さっきとは別人の様に、幸二がハイテンションで写真集を眺める。
「ちょっと、何あれ・・・。」
トランペットを持った女子二人が、ハイテンションで写真集を見つめる幸二を不審そうに見る。
幸二は、それに気がついて健介に写真集を返した。
「わっ悪いな！いっ今のおっ俺にはしっ思春期もかっ勝てないんだ・・・ぞっ！」
「バサバサバサ！」
動揺している幸二に追い打ちをかけるように、健介がバックから４冊の写真集をばらまいた。
「うわ～本当に何あれ・・・。」
再び女子二人の声が聞こえてくる。
「あ～あ、落としちゃった！あっ旦那、見ちゃいました？」
「とっ取りあえず逃げるぞ！」
幸二が散らばった４冊を拾い上げ、健介の手を引いて正門まで走った。

「ゼーゼー・・・はぁ・・・はぁ・・・。」
体力の余りない幸二は荒い息を吐く。健介は余裕の表情だ。
「その『はぁはぁ』は疲れた『はぁはぁ』か？興奮の『はぁはぁ』か？」

「い・・・いらねぇ事聞くなよ。走ってて考えたけど、やっぱ俺はサッカー辞める。フットサルでもな。」
幸二は、健介に４冊の写真集を押しつけると、自転車に乗って家に帰っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7985a/

モンキーキッカーズ!!　-フットサルにかける青春-

2010年10月11日04時47分発行